

4 分析結果の概要（詳細分析は、8ページから23ページに掲載）

(1) 論理的な文章（大問〔一〕）を読む力について

内山節『戦争という仕事』より出題した。本文は、手紙から電子メールへという通信手段の変化が、人間関係の在り方の変化を象徴的に示していることを論じたものである。平明な読みやすい文章で、全体的に正答率が高かったが、上位層と下位層の間には顕著な差があり、下位層では文と文の関係や段落相互の関係を捉えることができていない。接続語やキーワードに着目させ、文と文、段落と段落の関係を押さえながら、論旨を把握する力を育てたい。

(2) 文学的な文章（大問〔二〕）を読む力について

吉村昭の小説『冬の鷹』より出題した。正答率が低かったのは、昨年度に続いて歴史小説からの出題であり、語彙がやや難解で、場面が想像しにくかったためと考えられる。また、登場人物の心情を考える際には、その言動を総合的に捉えて判断する必要があるが、行動や表情、発言など複数の記述を手がかりにすることができていない。人物の心情を考える上で必要な情報に線を引かせ、そこから推測させるなど、丁寧な読解指導を行う必要がある。

(3) 国語基礎力（大問〔三〕）について

前半はグラフを含む新聞記事の読解問題を、後半は慣用句や熟語、言葉の使い方、漢字の読み書き等についての問題を出題した。新聞記事の出題では、見出しを選択する問題の正答率が低く、大意を捉える力に課題のあることが分かった。新聞記事や論説文などを短く要約する練習を通して、大意や要旨を捉える力を育てたい。

(4) 古文（大問〔四〕）を読む力について

松平定信の随筆集『花月草紙』より出題した。本文は、主人の思いやりが従者にとってはあだとなる話である。他の大問と同様に、この問題においても、複数の情報を組み合わせて正答を導く力に不足が感じられる。意味の分からない古語があっても、手がかりを組み合わせれば正答に至ることを体験させ、あきらめずに読み解く意欲と姿勢を養いたい。